

悪夢が思い出に変わるまで

J . T

2001年7月15日は朝からどんよりとしていて、今にも雨が降りそうな日曜日でした。愛媛県立中央病院のICUの静かな部屋の中に呼吸器のシューシューという音だけが響いていました。病院に運び込まれてちょうど1週間、「最高に回復しても車椅子以上にはなれない」との診断を受けながらも、心臓だけが自力で動いている状態でした。時折動く指の先に、美香の「生きたい」という強い意志を感じ取るものの、呼吸器の数字が95から上がらなくなっていました。そして、坂道を転がり落ちるように数値は下がり、妹と弟の到着を待つことなくゼロになりました。相変わらず静かな部屋の中に呼吸器音だけがシューシューと響いています。私の後ろから担当医師が静かに言われました。

「今、心臓が止まりました。7月15日16時14分、死亡」

「嘘でしょう？美香ちゃん、起きてよ~~~~！目を開けてよ~！」

私と長女の声がICUの部屋の中に響きわたりました。

そして、19歳だった美香の命日となったのです。

1週間前、友達に会うために家を出て5分後、家からわずか500メートルの場所で追い越しのために反対車線を走った外車と美香の乗ったミニバイクが正面衝突をしました。

私は、娘が事故にあった時間も、知らせが入った時間も、のんびりとテレ

ピを見ていました。そんな自分が許せなくて、未だにテレビをずっと座って見ることはできません。

生きていたら30歳、きっと結婚していたでしょう。子どもも授かっていたでしょう。

30年前の3月31日の早朝、予定よりも2週間早く、夜明けと共に色白でとても可愛い女の子が産声を上げました。美香と名付けられた娘は、すくすくと健康に美人に育ちました。この子の未来は永遠に続くものと思っていたし、まさか親が娘の葬儀を出すなんて誰に想像できたでしょう。19歳と3ヶ月と15日で美香の人生は終わってしまいました。できるものなら私の残りの人生を差し出したい気持ちでいっぱいでした。この世には神も仏もないと思い、私自身も生きる意欲を失っていました。家の中から会話が消え、もちろん笑い声も消え、ただただ時間だけが何も変わらないかのように過ぎ去っていきました。玄関には美香の靴があり、みんなと同じ場所にお茶碗とお箸があり、毎朝同じ時刻に美香の携帯電話の目覚まし音が時を告げるのです。

今までと何も変わらないのに、どうして美香はいないんだろう？

事故後、中3だった息子が友達と塾に行っている時の様子を先生が知らせてくださいました。今までは何気なく言っていたであろう「死ねや」とか「殺すぞ」という言葉が出たときに、急に真顔になった息子が言ったそうです。

「人の死は、そんなに軽いもんじゃない！死ねとか、殺すとかいう言葉を簡単に使うな！」

息子には美香が身を持って知らせた命の尊さが充分すぎるほどに伝わったことを悟りました。長女と三女も、いなくなった美香の空間をうめるように仲良くなり、何気なく母を支えてくれました。夫も何も言わず、好きにさせてくれました。そんな母親を静かに見守ってくれた家族に心から感謝しています。

美香は永遠に家族、私の娘、そしてずっと19歳。